

江戸東京博物館友の会会報

目次

平成 21 年度 定期総会開催	1	江戸博クリップ『よろしくお願ひします』	6
新役員の分担決まる／新会長あいさつ	2	えど友サークルだより	7
『えど友』はおかげさまで 50 号を迎えました！	2	会議・会合日誌	7
竹内館長記念講演要旨『長谷川平蔵と森山源五郎』	3	えど友プラザ『江戸中期の石仏たち』『愛宕山考』	8
友の会セミナー『千社札にみる江戸の社会』	4	『高幡城(高幡不動寺城)』	9
友の会セミナー『旗本の園芸文化』	5	落語で江戸散歩…⑨ [黄金餅]	10
特別観覧会『手塚治虫展～未来へのメッセージ～』	6	催事案内／会員優待のお知らせ	11～12

平成 21 年度定期総会開催 会員自らが参加し創造していく「友の会」へ

江戸東京博物館友の会の平成 21 年度定期総会は、平成 21 年 5 月 22 日(金)午後 0 時 30 分から江戸博 1 階ホールにおいて開催されました。

司会の柏木静さんの進行により、玉木達二会長のあいさつ、来賓の江戸東京博物館・木村俊弘副館長および鈴木縁管理課長の紹介があり、木村副館長の祝辞をいただいた後、議長団の選出があり、議事に入りました。

議長団として、議長には清水良男さん(事業部会)、副議長に山本隆さん(同)、書記に稻垣武志さん(広報部会)と新倉隆一さん(総務部会)が選任されました。

はじめに議長より出席者 194 名、議決権行使書提出者 691 名、合計 885 名で規定数(3月末会員数 1,660 名の過半数 831 名)を満たしており、総会が成立している旨の報告がありました。

上程された議案は、次の通りでした。
第 1 号議案；平成 20 年度事業報告並びに収支決算報告(監査報告を含む)

第 2 号議案；平成 21 年度事業計画並びに事業予算

第 3 号議案；役員及び監事の選出

第 1 号議案、第 2 号議案は、若干の質問、友の会運営への提案などがありました。上程された議案は、満場一致(議長の言によれば『絶対多数』)で、提案どおりに可決承認されました。このうち第 2 号議案では今年度の基本方針として「会員が自ら参加し、創造していく事業展開をはかる」が新たに加えられたのが目立ちました。

また、第 3 号議案の役員及び監事の選出についても提案どおりに可決承認されました。その後、新任役員を代表して松原良新会長よりあいさつがあ

り、総会は午後 1 時 50 分に終了しました。

新役員に選任された方々とその担当は、別項(2 ページ)の通りです。

休憩の後、江戸東京博物館・竹内誠館長による記念講演「長谷川平蔵と森山源五郎—幕臣たちの世界—」がありました(講演要旨は 3 ページに掲載)。

さらに 4 時からは、7 階「桜茶寮」で懇親会が開かれ、100 名を超える会員が参加し、交歓のひとときを過ごしました。

【取材】文・写真：広報部会・岡田守弘



新役員の分担決まる

一會長に松原 良氏一

今総会で選出された役員・監事15名による協議の結果、会長には松原良氏を選出、各役員の業務分担を以下のように決定したことが、総会の席上発表されました。これで今後2年間の執行体制が整い、さらなる友の会の充実が期待されます。

〔敬称略〕

会長 松原 良

副会長 藤村武雄（事業部会長）

同 清水昌紘（事務局長）

会計 岡東和子

同 末永俊幸

運営委員 小林弘明（事業部会）

同 西村英夫（事業部会）

同 野川陽一（事業部会）

同 福島信一（広報部会長）

同 深尾恵美子（広報部会）

同 鈴木 寛（総務部会長）

同 藤井文乃（総務部会）

同 津嶋英夫（プロジェクト）

監事 早川良躬

同 松岡勝彦

※新役員、監事のプロフィルなどは次号でご紹介します。



新会長あいさつ

松原 良

加し、創造していく事業展開をはかる」という1項があります。すでに初めての試みとして会員による研究発表会の開催が決まっていますが、これだけではなく来年の友の会10周年に向けて、どのような“創造”ができるか、大きな課題ではないかと考えます。

幸い、今総会において質量ともに強力な役員を選出していただきました。また、新たに部会員になられる方も出てきて、各部会のパワーもますます充実しつつあります。

こうした皆さんのパワーを結集し、より有意義な、そして何よりも参加することがより楽しい会となるよう、友の会活動の展開を図っていきたいと考えております。

そのため、部会員、サークル、プロジェクト関係者をはじめとする会員各位の一層のご協力を、そして江戸博関係者のみなさんのご指導・ご支援をお願いする次第です。どうかよろしくお願ひいたします。

いまこのような大所帯となった友の会の運営の任にあたることとなり、その期待の大きさ、責任の重さを痛感しているところです。

今回の総会でご賛同を得ました本年度の基本方針には「会員が自ら参

『えど友』はおかげさまで50号を迎えました！

会報『えど友』はおかげさまで今号をもって50号を迎えることになりました。一口に50号といいますが、2カ月に1度ですから8年以上の歳月が流れているわけです。この間一度の遅れもなく定期発行できたことは友の会としても誇れる実績ではないかと思います。

『えど友』が産声をあげたのは平成13(2001)年7月のことです。タイトルも『友の会会報』となっていて現在の半分の6ページです。この年5月に行われた設立総会の模様などが報じられています。同年8月には早くも2号が2ページながら発行され、以後3号(10月・8ページ)、4号(12月・4ページ)と試行が続きます。平成14(2002)年1月の5号から13号までの8ページ

を経て、平成15(2003)年7月の14号から一部例外を除いて現在の12ページのスタイルが定着しました。ここに至る草創期の担当者は試行錯誤を繰り返し苦労されたことと思われます。

会報の愛称は2号で会員から募集し、4号で『えど友』に決ったことが報じられ、5号から使われています。この“えど友”は「江戸博友の会」を端的に表現し、親しみやすく心地よい響きがあります。そのため会報だけでなく見学会用の旗や帽子にも使われ、さらに「えど友サークル」や最近では「えど友研究発表会」などにも応用され、あたかも友の会そのものの愛称のような感を呈しています。

『えど友』の会報としての特徴は企

画ものの連載シリーズです。その第1弾は「ミュージアムショップ・名店めぐり」で9号の『人形焼「山田家」』から22号の『野菜菓子「梅鉢屋」』まで14回も続きました。次いで「江戸博界隈」が12回、「江戸博から大川を渡って…」が6回、そして現在も連載中の「落語で江戸散歩」(今号で9回目)と続いている。この連載は単に会の記録・告知だけでなく『えど友』の楽しさの源泉の一つといえるのではないでしょうか。

100号へ向けてより楽しい会報とするため、会員自由投稿欄「えど友プラザ」への投稿など多くの会員のみなさんのご参加・ご協力をお願いいたします。

「長谷川平蔵と 森山源五郎 —幕臣たちの世界—」

江戸東京博物館 竹内 誠 館長



今日は江戸時代後期の同時代に活躍した幕臣二人の話をします。一人は小説やドラマなどですっかり人気者になった江戸庶民の英雄、鬼平こと長谷川平蔵宣以。もう一人は森山源五郎孝盛、平蔵の後任として火付盗賊改を拝命し、幕臣中で学者文化人としても学識教養とも一流の人物です。表向きの説明はこれでいいのですが、反面彼らの出世欲はきわめて強く、お互いに罵り合うこともあります。人格者とはとても言いがたい面もあります。でも考えてみれば世間に聖人君子なんぞは稀有で、ごく人間らしい生き方ということもできるでしょうか…。

二人はまったく同家格の旗本ですが、出世は8歳年下の平蔵が早く、これに対する孝盛の対抗心は強烈でした。幕臣には二つのタイプがあって、立身出世や獵官に執念を持っているものと、そんな出世競争にあくせくするよりも、平穡に心豊かに暮らすほうがいいと考えるものです。このことは現代にも通じる感覚でしょう。

長谷川平蔵

29歳で長谷川家の遺跡を継ぐまで、若い次三男にありがちな相当なワルで、「本所の鎮」と異名をとり悪所通いなどもしたといいます。このとき下情にも通じ荒くれの世界にも顔が利き、後の騒動や揉め事の鎮圧に手腕を発揮します。御先手弓頭の加役として火付け盗賊改に任せられるや、悪をもって悪を制すやり方などで、盗賊の逮捕に目ざましい功績を残すなど、治安の維持に懸命に努力したことは皆さ

んご存知の通りです。文字通り無法者には厳しく、弱者には優しいパフォーマンスで大衆の心をつかみ、実質的な町奉行と大いにもてはやされました。実際に彼はその「町奉行」に何としてもなりたかったわけです。さらに無宿人の収容と再教育を目指す「石川島人足寄場」を献策し運営もしています。このように実力人気とも備えた平蔵でしたが、彼を見出した松平定信は、心底からの信用は寄せていませんでした。それは平蔵の人物や行動の評価が幕臣中では必ずしも良くなかったからです。こうして町奉行への夢も果たせぬまま、江戸の安寧秩序を守るという激務をこなしつつ、なんと死の3日前まで重責に耐えたのです。この不遇な正義漢を池波正太郎氏が小説に著し、時代劇ヒーローとして人気沸騰しました。

森山源五郎

34歳で家督を継ぎ大番・勤番を経て、47歳の時やっと小普請組頭に昇進しました。その出世のために、時の権力者田沼意次の係累を辿って、土方家と姻戚関係を結んだり、有力筋への賄賂や供応を繰り返すなど、獵官活動は平蔵以上に露骨です。

しかし学識の高さや優れた歌人として文化教養の面は大いに評価され、文武を奨励した老中松平定信に見出され、徒頭さらに目付へと出世します。目付役はエリート役人の第一閥門となっており、大岡越前守忠相は享保年間ですが、ここから遠国奉行・江戸町奉行などを経て、ついに大名にまで

出世をしています。一方孝盛は平蔵をライバル視しており、ともかく御先手鉄炮頭への登用を望みます。その生活ぶりはきれい事に修飾されてはいますが、彼の日記「自家年譜」からうかがい知ることができます。平蔵の死去によりようやく念願の、火付盗賊改を命ぜられますが、なぜか僅か1年で罷免されてしまいます。その恨み辛みや、前任者・後任者への悪口雜言の数々は、隨筆「蟹の燒藻」に連々と書きしるされています。

「よしの冊子」

彼らはともに能吏でありそれなりに職務を全うしたわけですが、老中松平定信の思惑や判断が二人の出世を左右することになります。それは定信の側近である水野為長が隠密を使って情報収集した「よしの冊子」も一役かっています。定信に対し世相の有様、噂話や情報を細かく報告したもので、殊に役人の本音、採用、昇進などについても記載されています。この裏情報により、定信が平蔵と孝盛の性格や本音を知ることになり、彼らへの完全な信頼を持ちえなかったものと思われます。結局二人は同じ出世コースで終るのであります。

おわりに

今日はドロドロした世界の話でした。同じ幕臣にも町人との身分を越え、豊かな江戸文化の一翼を担ったすばらしい武士たちが大勢いたことは、別の機会に紹介したいと思っています。

【記録】 文：広報部会・稻垣武志
写真：同・岡田守弘

「千社札にみる江戸の社会」

講師 滝口正哉さん（千代田区立四番町歴史民俗資料館・文化財調査指導員）



千社札の発生・展開

千社札といえば、神社仏閣に貼られ、江戸文化の代表的なものとして著名ですが、その由来や特有のルールは意外と知られていません。愛好家（活動家）は「せんしやふだ」と意識的に呼ぶのですが、まず白地に黒一色で住所・氏名・屋号を独特の書体（題名という）で書いた札（千社札）を神社仏閣に貼りつける行為を、題名納札といいます。これは明和・安政期の貼り札から始まり、やがて名刺代わりの「交換札」、グループで共同製作する「連札」が生まれ、幕末に大きく発展しますが、その後も活動家の組織は現代まで脈々と引き継がれています。

そもそも千社札という言葉は、千という数に心願成就の意があり、初午の「稻荷千社参り」に由来します。これがやがて札所寺院の納札と融合して、日常的に様々な寺社を巡り、札を競って貼るという、江戸特有の行動文化に発展していきました。すでに明和5（1768）年刊行の北尾重政作『絵本吾妻花』の挿絵のなかには、浅草観音堂の柱に「千社…」と書いた札がみえることから、すでにこの頃にはスタイルを整え流行していたことがわかります。

千社札に参加した人々

千社札は、そこに記載された文字情報から活動家の住所・職業を読み取ることができます。それによると、彼らの多くは下町の長屋の中下層民であり、職人や大工・鳶といった人々を中心に、当初は少数の武家・僧侶が加わる文化社会であったと推測できます。こうして貼り札主流の前期に生み出された文化現象が、やがて特有のスタイルとして理論付けがなされたのち、連札が盛んとなる後期には、活動家の中に錦絵制作に携わる人々が加わり、地域的・職業的特質のほかに独特の精神

性や美意識というものが備わっていったと考えられます。そこでは札を貼ることや、デザインを凝らした交換札・連札（続きもの）を制作するといった、その世界の内部で仲間同士が相互に競いあう精神が培われ、そのことが納札・千社札全体の文化的水準を引き上げていったのではないかと考えられます。

代表的な納札家

次に千社参りに興じた活動家について、現存する札や史料をもとに分析を試みます。一番古いといわれる「てんかう」「麁五吉」は、ともに文化・安政期の書物に先人として紹介されています。また「天愚孔平」（本名 萩野喜内信敏）は、松平家に仕える武士であり、儒学者でした。古く寛政2（1790）年刊行の「題名功德演説」において、彼は題名中興の祖として記され、他の様々な書物にも千社札に関して彼を讃える文章がみられます。一方、「源加一」も交換会の世話を務めるなど、初期の活動家の中でも中心メンバーの一人でした。都立中央図書館に現存する各種の略縁起（開帳の際に寺社で発行されるパンフレット状の印刷物）の中に、彼の年齢を記した書き込みがあることや、「玉池源加一」の札が遺されていることなどから、神田お玉が池周辺に屋敷を持つ下級旗本服部家当主の弟武次郎という人物と特定でき、寛政～文化頃を中心に御府内の寺社、とりわけ開帳場に足を運ぶ姿が彷彿とされます。その後、「田キサ」の題名を持つ梅素亭玄魚（文化14年～明治13年）が現れます。彼は幕末維新期の文芸界などに幅広く足跡を残した人物でもありました（後述）。

川柳・千社参詣双六・理論書など

梅素亭玄魚作「千社参詣出世双六」には、納札活動家の仲間内で代表的な参詣場所が22カ所描かれています。

また、川柳をみていくと、千社札は文化・文政の時代の生活や文化に深く入り込んだ存在のようです。一方、最初に巡礼納札との関連を指摘したのは「題名功德演説」で、貼り札（題名納札）をすれば一日参籠して祈願したのと同じ効力があると述べて、行為の正当性を付与しました。その後安政5（1858）年に刊行された「神社仏閣納札起源」では、寺社に札を貼ることの効用を主眼としつつ、その内容はより実用性に富んだものとなっています。この変化は活動家の裾野が広がったことを意味しており、江戸の千社札は、とりわけ幕末に錦絵・芸事関連の人たちが多く入ってきたのが大きな特徴といえます。

梅素亭玄魚について

千社札固有の文字を創始したとされる玄魚は、本名宮城喜三郎といい、梅素亭のほかにいくつもの号を持つ、幕末・明治初期のコピーライターのような人物でした。お互いに意匠を競い合う幕末の納札界において、おそらくはこの世界を牽引・主導する重要な役割を果たしていたと考えられます。浅草で修業し20歳で本石町の実家に戻り、版下の筆耕のほか、安政大地震直後の「鯰絵」は彼の考案ともいわれるなど、独特的のデザイン性を生かして幕末のさまざまなメディアで活躍しました。そして彼の交友範囲と納札界における活動家の受容層とが一致する事実は、納札文化が寺社参詣を母体とした從来の貼り札中心の活動形態から飛躍を遂げていることを意味しているのです。

その後、千社札は明治末から大正にかけて、復興運動が起り再び発展していきますが、これが現在に結びつく文化的流れになっているようです。

【記録】文：広報部会・松田悠美子
写真：同・佐藤幸彦

旗本の園芸は趣味から始まっています。自分が好きだから、お庭があるから、珍しい花があるから、というわけです。植木屋は売れなければ商売になりませんから扱いませんが、旗本は金に糸目をつけず、むしろ珍しいものは多少手がかかっても扱っていました。

昔もあった有名人の序文

狂歌などで有名な大田南畠(1749~1823)という人は、自分では園芸はやっていませんが、大変朝顔の普及に貢献した方です。文化14(1817)年に『あさかほ叢』、文政元(1818)年に『丁丑朝顔譜』という朝顔の本が発行されました。これらに序文を書いています。“…めづらしきたねをまきて、日々にあらたなる花をめでば、まがきのつるの長さもてあそび…”といった調子ですが、当時としてはめずらしい朝顔が紹介され、また高名な南畠の序文が載っていることで大評判になりました。このブームは文政期から天保期の前半まで続きますが、天保の改革(天保12年・1841)のために下火になりました。

朝顔ブームの再来

朝顔が再び大変なブームになったのは、嘉永・安政期(1850年代)ですが、その中心となった人は、自分でも園芸をやる鍋島直孝(1809~1860)という旗本でした。安政元(1854)年に出された『朝顔三十六花撰』に次のような序文を書いています。“…‘あさかほ叢’や‘丁丑朝顔譜’に描かれた朝顔は遠い昔のことになり、いまでは沢山の種類の朝顔が見られるようになった、についてはこのたび36種を選び、そのひとつひとつを絵にし一冊の本にしたので、同好の方々にお配りしたい…”。ということで、この36種について、誰がどんな花を栽培しているかが克明に書かれておりました。この本は前のブーム期と違って、植木屋は沢山ありましたが、植木屋を完全に排除した本になっています。多分、著者の万花園という人が、“植木屋ご

「旗本の園芸文化」

講師

平野 恵さん

(台東区立中央図書館)

郷土・資料調査室専門員

第81回 江戸東京博物館友の会セミナー

(2009/5/23)



ときが…！”と考えていたのだと思います。この鍋島直孝という人は、杏葉館という号を持ち、飯田町に広大な杏葉館屋敷があり、そこに多くの人々を招いて、藤の花や朝顔、萩を見ながら、歌を詠んだり、お酒を酌み交わしたり、大変優雅な時をおくっていました。

その他、東京大学植物園(小石川植物園)に伝來した梅の図譜(原本は今なし)には、梅の品種を提供した人々の名前が記されており、この中の大半は、旗本身分の人たちで構成されているなど、園芸文化には、思った以上に旗本がかかわっていました。以下、簡単に記します。

竹本要斎(1831~1899)という人は、その父親同様大変な朝顔好きで、植木好きが高じて陶芸まで手を染めるようになり、陶芸の道では有名な竹本焼の創始者になりました。

シロツメクサの名前の由来は?

竹園という号を持った旗本貴志孫太夫(1800~1857)という人は、自分で園芸をやり、それを絵にし、『竹園草木図譜』を著しました。その“卷

21”には、弘化3(1846)年にオランダからランプ等ガラスの器物が届いたが、それらを保護するためにある草花が詰められていた、と書かれています。その草花こそ名前の由来となった“シロツメクサ(クローバー)”でした。

馬場大助(1785~1868)という人は2千石の旗本ですが、こう書き残しています。“自分で見もしないで、他の人の絵から写すように描くのはどうしても真を失ってしまうのでよくない、実際に自分が見たものを描くのがよい”と。実際この人は江戸近辺のいろいろな地域(道灌山、不忍池、巣鴨、千駄木、品川、駒場、増上寺等々、30カ所以上)をくまなく歩いて『群英類聚図譜』を書き残しています。遠くは、秩父や八王子、大宮、川越あたりまで足を伸ばして草花を描いていますが、なぜこんなことができたか、と言えば、そういうことのできるお役人でよく出張していたからです。

時代は少し下がって、大谷木醇堂(1838~1897)という幕末の毒舌家といわれた旗本がいました。この人も園芸大好きという人で『醇堂叢稿』という本を後世に残しています。今となってはもちろん分かりませんが、当時は有名だったので、いろんな旗本たちの得意分野が書かれていて、よくぞ残してくれた、という思いです。例えば、花菖蒲は松平左近吾、菊花は浅草の坂井右近、江東小梅村の高山角兵衛、五番町の青木五左衛門、芍薬は本所の奈須玄竹、蓮は小日向服部坂上の長野鞠負、梅は小石川白かべ町の六角や五番町の戸川、さくらは青山の久保榮左衛門、といった具合です。

このように、生活にゆとりのある旗本が趣味からスタートし、園芸愛好家として、あるいは学問や政策協力者として、明治へとつないでくれました。その流れは途切れることなく、だんだん大きくなつて確実に現在に至っています。

【記録】文・写真：広報部会・福島信一

江戸東京博物館友の会特別観覧会
(2009/4/21)

『手塚治虫展 ～未来へのメッセージ～』



4月21日の17時から19時まで「手塚治虫展」の友の会特別観覧会が開催されました。この展覧会は平成元年2月9日に惜しくも60歳の若さで没した手塚治虫の「生誕80周年記念特別展」と銘打って、4月18日から6月21日までの間、開催されていたものです。

手塚治虫(本名:治)は昭和3(1928)年大阪の豊中市の比較的裕福な家庭に生まれました。父は会社員ですが、有名な丹平写真俱楽部の会員で色々な入賞作も撮っていたようです。両親共に漫画好きで、家には田河水泡の「のらくろ」のシリーズなど漫画の

本がいろいろあったということです。治虫は5歳の時、宝塚の祖父が住んでいた家に移り、24歳で東京に出るまでここに住みます。彼は敗戦の年に大阪帝国大学医学専門部に入学しました。高校(旧制)に行かないで医専のコースを選んだのは、私見ですが徴兵猶予を狙ったものだと思います。

在学中に、主として子供向けのストーリー漫画を多数発表し、新劇に出演し、ときにはピアノの隠し芸を披露するなど、漫画以外のいろいろなことにものめり込んでいたようですが、昭和27(1952)年、24歳の時医師免許を得、鉄腕アトムを引っ提げて仕事の場を東京に定め、八面六臂の活躍が始まります。

特別観覧会は、最初30分間、江戸東京博物館展示企画課長・江里口友子さんの解説を頂き、見学に入りました。展覧会の副題は「未来へのメッセージ」で、同展図録冒頭にもあるように、手塚治虫は「人間とは何か」「生命とは何か」のメッセージを、今も作品を通して発し続けているのでそこを感じてほしい、というのが江里口さんの主旨でした。

本展覧会を見て、手塚作品を愛読し、

アニメを愛好する人々はきっとそのような感慨を持ったことでしょう。筆者のように年齢的には手塚に近く、しかも今まで手塚作品を横目でしか見なかった者には、大変な衝撃となりました。それは「天才」というものはいかに偉大であるか、ということです。確かに彼は子供の時から画才を發揮し、宝塚という住環境、ゆとりのある家庭環境に恵まれました。しかし漫画家として世に出てからの、奔流のようなエンターテインメントのアイデア、漫画やアニメの作業の早さ、流麗な線や色彩やリズムの感覚、すべてが我々凡夫の想像を絶するものです。彼の発するメッセージにこだわらず、天才の才智と能力に圧倒されるだけでこの展覧会を見た価値がありました。手塚治虫を好きな人も、嫌いな人も、彼の作品を見た人も見ない人も、この展覧会を見た人は心打たれるものがあったはずです。

因みに手塚の漫画原稿は、生涯に15万枚、総タイトル数600以上、700以上ともいわれ、制作したアニメーションは70作、と夢枕貘氏は図録に記しています。

【取材】文・写真:広報部会・佐藤幸彦

江戸博クリップ

谷 紀 子

「よろしくお願いします」

学芸員 熊

昨年、『花はふしげ』という本が出版された。化学的な分析により明らかになってきた植物、とくに花の色の発現のしくみについて書かれた本である。私が色に興味を持ち始めた中学生頃のことを思い出し、なつかしくて本を買ってしまった。

「なぜ、その植物にはその色の花が咲くのか?」ソメイヨシノやヤマブキのように単一色の花を咲かせる植物もあれば、ウメのように花の色が数種類の植物もある。なぜ、そうなったのかが不思議だった。

色への興味は、いつしか花から絵画

や工芸品に使われる色材(顔料、染料、釉薬など)へ移り、その発色のメカニズムが知りたくて大学は理学部を選んだ。しかし、数学や物理に関する授業は大嫌い。救いといえば、無機顔料や有機染料、色素が纖維に染着するしくみなど、色に関する知識が増えていくことだけ。

2年生の終わり頃、『古美術品材料の科学』という本を読み、美術材料の分析や文化財を次世代に伝えるための自然科学的研究を行う学問、「保存科学」という分野があることを知った。その道に進みたいと強く思った。ただ、

趣味的な領域と思われがちであったため、仲間からは「一線を退いてからやりたい」と揶揄されることもしばしばであった。でも、マイペースなB型気質が幸い?し、江戸博の学芸員になれた。

江戸博には、私のように毛色の変わった職員もいる。友の会のみなさまとは今まであまり縁がなかったが、これを機に、お見知りおき願えればと思う。

◆このコラムは江戸博の学芸員や講師など館職員の方に執筆をお願いしています。

◎活動概況

- ◆落語と講談を楽しむ会：4月4日(土)浅草吾妻橋たもとの水上バスのり場前に集合、隅田公園の満開の桜を見物、今戸1丁目・潮江院の「可楽まつり」に参加、9代目三笑亭可楽一門の落語を鑑賞し、終了後今戸神社など浅草界隈を散策した。参加者11名。5月2日(土)深川江戸資料館小劇場に集合、アマチュア落語家による「樂笑会・第64回発表会」を鑑賞した。サークル・メンバーの山内啓巳さんが落語「百川」を熱演、大喝采をあびた。参加者はメンバー以外の友の会会員も含め49名。
- ◆藩史研究会：4月10日(金)一昨年7月に山口義正さんが研究発表した甲斐甲府藩主の眠る月桂寺を中心に新宿の5寺を、大渡眞司さんの概要説明でめぐった。その後、新宿御苑で散りゆく桜の下でお花見を行い親睦を深めた。参加者26名。5月8日(金)初めてのバスツアーで、昨年12月池田敏之さん発表の「関東郡代伊奈氏」および今年1月内田勝元さん発表の「武藏岩槻藩」に関連する史跡・藩主菩提寺などをめぐり見学した。帰路の車中では「秩父事件」のビデオ学習もあり、充

実した1日を過ごした。参加者は26名。

- ◆古文書で『八丈実記』を読む会：4月9日(木)、4月24日(金)、5月14日(木)、5月29日(金)に例会を開催。参加者は各8、7、10、11名。
- ◆江戸御府内八十八ヶ所をめぐる会：第23回として4月23日(木)と4月26日(日)に「第13番高野山龍生院」(港区三田)など4ヶ所をめぐった。参加者は各28名、11名。また、第24回として5月28日(木)と5月31日(日)に「第71番新井山梅照院」(中野区新井)など3ヶ所をめぐった。これで84ヶ所の札所をめぐったことになり、余すところ4ヶ所となった。参加者は各26名、12名。



●各サークルとも引き続きメンバーを募集しています。奮ってご参加ください。参加ご希望の方は、はがきに①サークル名、②会員番号、③氏名をご記入の上、友の会事務局へお申込みください。また新しいサークルの立ち上げ希望の方は友の会事務局へお問い合わせください。

申込・問合せ先 〒130-0015 東京都墨田区横網1-4-1
江戸東京博物館友の会事務局 Tel.03-3626-9910

◆役員会

4月8日(水)17時開催。役員推薦委員会の経過報告があった。「町方書上」プロジェクトからも役員を1人選出することになった。今後の役員推薦方法に規定改定の要望があった。総会資料の検討を行った。出席者11名。

5月13日(水)17時開催。新役員候補者も出席し打合せを行った。玉木会長から本年度の基本方針について説明があり、新役員も了承した。新役員の業務分担について玉木会長の提案をもとに話し合い決定した。定期総会の進め方と係の分担について話し合い確認した。出席者20名。

◆事業部会

4月2日(木)17時開催。役員推薦委員会の中間報告として事業部会関係候補者の報告があった。3月の事業報告と今後の事業計画について話し合った。出席者23名。

5月7日(木)17時開催。4月の事業報告と今後の事業計画について話し合った。特に9月に予定しているバスツアーについてコース、予算・参加

会議・会合日誌
2009/4~2009/5

費などを検討した。出席者23名。

◆広報部会

4月17日(金)14時開催。部会に1名入会があった。20年度の活動報告と21年度の活動方針を部会長の原案に基づいて協議した。『えど友』50号のスケジュール、内容、担当者について話し合った。出席者10名。

5月15日(金)14時開催。今期総会で退任する佐藤幸彦部会長の後任に福島信一氏を決めた。『えど友』50号の進行状況を確認した。出席者7名。

◆総務部会

4月1日(水)13時開催。『江戸博NEWS』65号などの発送業務を行った後、総会へ向けての日程などを話し合った。出席者15名。

4月15日(水)13時開催。総会案内、総会資料のとじ込み作業を行ったが、印刷機故障のため中断。出席者14名。

4月21日(火)前回中断した資料のとじ込み作業を行った後、友の会特別観覧会の受付を行った。出席者7名。

4月22日(水)13時開催。『えど友』49号、総会資料などの発送業務後、総会までの日程・役割分担などの確認を行った。出席者18名。

5月7日(木)13時開催、総会出欠はがきの整理や総会・懇親会の段取り打合せなどを行った。出席者16名。

5月27日(水)13時開催。総会の反省と総括を行った。出席者14名。

◆江戸博と友の会との連絡協議会

4月24日(金)13時開催。江戸博館長と友の会会長のあいさつ、役員と次期役員候補者の紹介のあと、友の会より事業の報告、計画の説明を行い、意見交換を行った。出席者23名。

◆文政町方書上翻刻 プロジェクト

4月2日(木)、16日(木)、5月7日(木)、21日(木)A、Bグループとも例会開催。出席者は(A)各8名、8名、9名、9名、(B)各9名、8名、10名、10名。

江戸中期の石仏たち —江戸川区の墓標仏—

どうめき
百目鬼喜久男

私が墓標石仏という言葉を知ったのは、江戸川石仏の会編「江戸・下町の石仏」という写真集に出会ったときだった。この本は、城東7区（江戸川、葛飾、足立、江東、墨田、荒川、台東）に市川市行徳を加えた地区に所在する、主に墓標石仏を対象として、石仏愛好家が撮影した写真集である。石仏といえば、武藏野の野墓地や路傍に立つ石地蔵や庚申塔などが思い浮かぶが、私が住んでいる江戸川区も都市化が進み、現在では身近な所ではこれらの石仏は見られないのではないかと思っていた。しかし「江戸・下町の石仏」という本を手にして、江戸川区には江戸時代中期に建立された墓標石仏が数多く残っていることを知ったのである。

墓標石仏（墓標仏）とは、墓石に觀音菩薩や地蔵菩薩などを浮き彫りにしたもので、舟の形をした光背には物故者の戒名と命日が刻まれている石塔である。寺院の門前などに立っている石地蔵といえば、像の全体を丸彫りにした石像であるが、墓標仏は戒名を刻むための舟形の光背を持つのが特徴である。墓標であるから、現在ではその大半は寺院の中に残されていることは言うまでもない。

寺院の墓域は、関係者以外の立ち入りは遠慮するものと思っていたが、この際失礼して、立ち入りをお許し願うこととした。早速、毎日の散歩コース近くにある寺院を訪ねてみると、そこには数え切れない程の墓標仏が残されていたのである。そして、その墓標仏の光背に刻まれている年号を確かめる

と、その大半が元禄、享保時代を中心とした17世紀後半から18世紀前半にかけての江戸中期に建立されたものであることを知り、驚嘆したのであった。寺院に残っている墓標仏は、いまでもなく建立された当時の場所に立っている訳ではない。寺院の広大な敷地も歳月とともに狭められ、墓域も区画整理されて、多くの墓石は無縁仏として一ヵ所に集められ、その墓標群は「三界萬靈供養塔」などと呼ばれている。しかし、江戸川区内の寺院の檀家には江戸時代から続いている家が多く、江戸中期すなわち今から三百年もさかのぼる元禄、享保時代の墓標仏が、近代の墓石の間に並んでいるのが珍しくないのには驚かされた。

「東京の石仏」の著者佐久間阿佐緒氏によれば、17世紀後半になって江戸市内で墓標仏が大量に製作されたのは、江戸時代初期の江戸城や諸大名の邸宅の築造が一段落して、石垣用として伊豆、相模から大量に江戸に持ち込まれた石材（安山岩）が残り、それがただ同然に手に入ったので、墓標仏の製作に充てられたのであろうとしている。当初は富裕な町民、農民階級の特注品だったが、次第に量産され既製品として安価に販売されるようになり、一般庶民に普及したという。

このことは当時流行した浮世絵版画と同じように、美術工芸品の一般商品化、大衆化の要望に沿うものであった。また民衆は、墓標に浮き彫りされた仏像に亡くなった人の肖像を重ね、あるいは浮世絵美人の親しみを感じたのではないか。通俗化した墓標仏は、信仰の対象というよりも、まさに江戸庶民が創造した文化の一つであると、「東京の石仏」の著者は述べている。

墓標仏のひとつひとつの表情には、石仏師を通じて当時の江戸庶民の情念が刻まれているように思える。私はこの情念に触れるために、これからも数多く残された墓標仏の観察を続けたいと思っている。

愛宕山考 「あたごやま」「アタゴサン」?

山内啓巳

「次は『愛宕山』を演るぞ～！」と、思わず口走ってから1年半、私の属しているアマチュア落語会の発表会に向けて、「愛宕山」のCD・DVD・落語全集・実際の高座を見たり聴いたりしているうち、「あたごやま」「アタゴサン」？一体どっち？という疑問がでてきた。

文楽・志ん朝をはじめ東京の嘶家は皆、嘶の中では「アタゴサン」と発音している。上方の嘶家、米朝・枝雀も「アタゴサン」である。しかし、題名を見ると、落語全集には、東西とも「あたごやま」と仮名を振ってある。

NHK放送博物館のあるのは「あたごやま」で、「アタゴサン」とは呼ばない。古くからのことわざに「伊勢へ七たび、熊野へ三度、愛宕山へは月参り」とある。この愛宕山は、京都の愛宕山であるが、発音は「アタゴサン」である。以前は、東京の愛宕山は「あたごやま」で、京都の愛宕山は「アタゴサン」が正しい呼称である、との説が有力であった。

芸評論の大御所安藤鶴夫氏は、この嘶の舞台は京都の愛宕山であるから、「あたごやま」は誤りであると主張し、安鶴さんの監修する本では、題名にも「あたごさん」と仮名を振っている。

榎本滋民氏も、京都の愛宕山は「アタゴサン」であり、この山にある愛宕権現を勧請したのが東京の愛宕山であるから、東京の山も「アタゴサン」と呼ぶべきだが、東京人は「あたごやま」と呼び習わしている、と述べている。

二人の説が正しければ、上方には「あたごやま」という表現は存在しないはずである。ところが、米朝の著作にも「あたごやま」と仮名が振ってあるし、枝雀の全集でも、題名は「あたごやま」である。

この問題に関するひとつの答えを、志ん朝の落語全集で、京須脩充氏の解説文に見出した。氏の紹介によると、米朝師が「アタゴサン」正統説を否定しているとのことである。米朝師の説では、「アタゴサン」のサンは、「様」であること、つまり、「天神さん」とか「お稲荷さん」の「さん」と同じで、愛宕山の上にある愛宕神社の尊称なのである。そういうえば、京都というところは、「おマメさん」「おイモさん」と、豆や芋にまで「さん」を付けるではないか！ 京須氏の引用している米朝説は、かなり説得力があるようと思える。なにしろ、落語の生き字引、人間国宝ののたまう言だから、重みが違う。

現在の京都の人は、この山のことを何と呼んでいるのだろうか？ この疑問を解くために、一昨年11月初め、京都に行ってきた。嵐山から亀岡までトロッコ列車に乗って往復。車内に観光ガイドのアナウンスが流れる。愛宕山が見えてきた……「あそこに見えるのが、『あ・た・ご・や・ま～』……」

高幡城（高幡不動寺城）

島尻茂樹

高幡不動は有名ですが、その裏山の高幡城の存在はあまり知られていません。京王線で二駅先の「平山城址公園」の方が知られています。少年の頃から「お不動さん」には動物園の帰りに立ち寄ったこともありましたが「城山」と聞いて、よくある地名かと、気に留めませんでした。城の本やネットでも、あまり触れられていません。しかし高幡山金剛寺との関係で見れば、城としての歴史と重要性は必然となるでしょう。山裾の峰は寺を両腕で懷に包み込んでいます。山は寺の金剛山（金剛力）であり連なる愛宕山（神社）となり、山は御神体と言えるでしょう。里が広がる平地の中にあり、孤立の比

高50mの小山峰です。遠望して見れば寺の山門を城門とし、虎口に鐘楼台を配し、五重塔を櫓に見立てれば立派な平山城に見えます。天然の地形そのものを城郭にする「寺城」であり、その形態と郭の址は今も叢の中に見ることができます。

歴史から見ても、武士の誕生との関係が深く、城郭史からも、城誕生の意匠を知る重要な遺跡です。武蔵武士団の一派、西党の日奉氏の一族である高幡氏がこの地を本拠にしたことにより寺の基礎が整ったようです。その後、高幡氏の支族の平山氏が館をつくり、不動堂の再建に当たった記録もあります。鎌倉時代には高麗地方から来た、平氏を祖とする高麗氏がこの地を支配し、寺の拡大に当たっています。高麗氏は今の不動堂の辺りに館を構え、自ら不動堂の護持者となつたと伝わっています。城域全体の骨組みは高麗氏の時代に築城されたと見るのが妥当でしょう。

この地を支配する武将にとって、この山に築城することと、この寺の宗教権威を持つことが、次第にステータスとなり政と軍事上必然となつたと考えます。足利を始め、多くの有力武将が寺に寄進を行なつていて分ります。寺の史書は「室町中期以降の当山は法流相承の混があつた」と伝えています。戦国の武将の間では「汗かき不動」との呼び名があつたようで、城郭としての重要性を増して行き、防衛の様相を整えつつ、寺城として使われてきたことがうかがえます。まさに戦乱の中で寺院と城郭が一体をなした「高幡不動寺城」と言えます。

高幡城での大事件は享徳の戦末です。永享7(1435)年「永享の乱」の足利公方家と上杉関東管領家の争いは収まるところを知らず、享徳4(1455)年父禪秀を討たれた関東管領・犬懸憲顕は京より室町幕府の援護を得て扇ヶ谷上杉・山之内上杉家と連合して、足利公方家・成氏と立川河原で決戦に及

ぶが敗れてこの寺城に入りましたが、扇ヶ谷上杉顕房は重症で死亡、憲顕は自害しました。境内の上杉堂にある「茶湯石」は墳墓で、百ヶ日茶湯供養の風習が今に伝わっています。

戦国時代、小田原北条氏の文書には「高幡之郷大学助知行分」とあり、また天正年間には八王子城主北条氏照の家臣、高幡十右衛門が居城したと伝わっています。

江戸時代には関東三大不動の一つとして賑わい、多くの学僧も出て、城山にも大堂伽藍が建ち並び壮大でしたが、文久元(1861)年の火災で、僅か一部を除き焼失、のち再建され今日に至ります。幕末の「新撰組」土方歳三は近郷の出身で、銅像が人気とか。

30年前に訪ねた時は門前通りも木造が多く、土産店や茶屋もあり、駅も古風で、城山の隣の邸宅を訪ねた折、裏が城跡と聞きました。今も変わらぬ名物の饅頭を食べながら境内の愛宕池を脇に山路を登ります。八十八カ所の地蔵巡りの順路の立札がありますが、城の案内はありません。路を登った所で本丸郭の土手に出ます。近路で、土手を登ると本丸の高台に出ます。そこから街の様子を眺めて心澄ませ、松の間に多摩川を遠望すると武将に成れます。西の峰ぞい遙かに見える平山城も近く感じます。天気の日には後に富士も見えます。

平山城址に行くハイキングコースもあったそうですが、多摩テックができてからは道導みちしるべも姿を消しました。平山城は城址公園となり、高幡城は不動明王となり人心に生きています。同じく武藏野の寺城として深大寺城・善福寺城があります。

「名月にふもとの霧か田のくもり」

山下の芭蕉句碑



[黄金餅]



麻布…木蓮寺のモデルとされる曹渓寺

落語ネタをもとに江戸風情をさがしながら、散歩をしてみようという趣向で、今回は時間と好奇心と体力に余裕あるあなたに、これこそ極め付けの江戸歩きを紹介します。

「黄金餅」。嘶の筋はかなり不気味で楽しいものとは言えません。どん底の貧乏長屋に住む願人坊主の西念は、吝嗇がこびりついて病氣になってしまって薬代が惜しいからと、医者にもかからずひたすらカネをためこんでいます。ためた金貨を病氣見舞いとしてもらったマンジュウに包み、まるごと飲み込んで絶命してしまうという異常さ。そのありさまを隣からのぞいていた金兵衛が、親切ごかしに「オレが弔いを出してやる」と長屋の連中と早桶を担いで麻布の貧乏寺へ。そこで生臭坊主にてたらめな葬式をさせた後、焼場では西念の死体を生焼けのまま引きずりだし、赤鯛(錆びた包丁)で腹を切割いて、飲み込んだ金貨を取りだすというピカレスク落語。同じ「死人のもの」でも『らくだ』よりすごみがあります。そんな内容でも志ん生はとぼけた軽い調子で明るくはこんでゆきます。さらに金兵衛はその金を元手に目黒で餅屋をはじめ、その名も「黄金餅」というブラック商品を売りだしたところ、大そう繁盛したそうです。



▶下谷 銀座線基地

嘶の目玉は道中だて？

その弔い道中がポイントで、道順をそのまま書き写すと、下谷山崎町～上野山下～三橋～広小路～御成街道～筋違御門～神田須田町～新石町～鍛冶町～今川橋～本銀町～石町～日本橋～通四丁目～京橋～新橋～土橋～久保町～新し橋～愛宕下～天徳寺～西ノ久保～飯倉六丁目～飯倉片町～麻布永坂～十番～大黒坂～一本松坂～麻布絶口～釜無村木蓮寺となります。

この道筋をよどみなく語って「麻布の木蓮寺に着いたときは、ずいぶんみんなくたびれたけど、しゃべるアタシもくたびれた」というところでドッと笑いがきます。

嘶の道筋どおり下谷から麻布まで、たっぷり 12km 以上にはなります。前半は昔からの繁華街(ちょっと古い表現?)を只管行くことになりますが、後半では坂が多くて起伏があり昔の郊外の情景を示しています。これをまとめて歩こうってんだから、気まぐれとは言いながら気合のウォーキングになります。大都会の家並(?)を見渡しながら、では…

上野から新橋まで

まずは東上野4丁目、地下鉄の車両基地付近から上野駅に出て、地下鉄銀座線の路線に沿って歩きます。三橋はあんみつ屋に名を残し、お馴染の鈴本演芸場の前を通って、広小路から中央通り(旧御成街道)を南下してゆきます。秋葉原は・・・・・カルチャーと他人だらけの異界でなぜか不愉快、万世橋で神田川を渡り、すこし上(旧交通博物館跡)に筋違御門の跡があります。須田町で国道17号(旧中山道)と合流し、神田駅から今川橋を通って日本橋へ、老舗と新参が軒を連ねたビル群の間を歩きますが、さすがに江戸時代からの商業中心地として重厚さを感じさせられます。ところでかつて日本橋の手前に「花むら」という小粋な料理屋があったそうで、そこで圓生師匠も池波正太郎氏も旨いめしを食べたことを書いていますが、今は…あ



▲神谷町 古刹の趣き天徳寺

るのでしょうか。日本橋を渡ると左手に、庶民向けの食い物屋が並んだ木原店、俗称「食傷新道」てえのがあったそうで、ちょうどコレドビル(旧白木屋)あたり。中央通りを進んでゆき、京橋の交番は擬宝珠を模したと思われるへんてこでカッコ悪！ 京橋から銀座、新橋まで超高級目抜き通りは、素寒貧には全く無縁のこれまた異界で、ちょっとひがみつつ早足で通り過ぎます。

愛宕から麻布まで

「立田野」を横目に甘い誘惑をグッとこらえ、銀座御門通りを右折して土橋から西へ、「新し橋」は西新橋1丁目交差点のこと。左折してビジネス街特有の清潔だけど素っ気ない道を行き、愛宕山を回りこむと古刹の雰囲気がいい感じの天徳寺です。ここ神谷町付近は小路地にも懐かしい情緒がありここも和みます。狸穴から飯倉片町で永坂を下り麻布十番へ、そして大黒坂・一本松坂を上り・絶江坂までたどり着いたときは、弔い行列の連中同様こちらもへとへとです。だもんで有名な善福寺なども省略し、そこいら辺のお寺を適当に「釜無村木蓮寺」モデルということにして、狂気のような散歩は終了。金に目がくらんだ金兵衛もなければ、こんな疲れることはヤッてられませんね。



▲麻布絶江坂 木蓮寺？付近

【取材】文・写真：広報部会・稻垣武志
イラスト：同・松原良

催事案内

古文書講座

各編とも9月から第2期を開講

第1期は7月で終り、9月から第2期を下記日程で開講します。自動継続はありませんので、各期ごとに改めてお申込みください。申込締切は各講座とも7月31日(金)です。

◆入門編

- ・講師：小松賢司さん（学習院大学大学院史学専攻）
- ・開催日：9月2日(水)、10月7日(水)、11月4日(水)
- ・時間：A講座は10:30～12:30
P講座は14:00～16:00
(注意) A講座かP講座かの希望を明記

◆初級編

- ・講師：田中潤さん（学習院大学大学院史学専攻）
- ・開催日：9月16日(水)、10月21日(水)、11月18日(水)
- ・時間：14:00～16:00

◆中級編

- ・講師：長坂良宏さん（学習院大学大学院史学専攻）
- ・開催日：9月19日(土)、10月17日(土)、11月21日(土)
- ・時間：14:00～16:00

- ・会場：各講座とも江戸博1階会議室または学習室1、2
- ・定員：各講座とも80名（会員のみ）
- ・参加費：各講座とも全3回1,500円（初回一括払い）

◆第1期の残日程

入門編7月1日(水)、初級編7月15日(水)、中級編7月18日(土)

【企画担当責任者】上田太一（事業部会）

友の会セミナー

第83回「浮世絵の魅力」

講師 小澤 弘さん

（江戸東京博物館都市歴史研究室長・教授）

◆近年浮世絵が大変注目を浴びています。江戸博でも7月から9月の「写楽 幻の肉筆画」、9月から11月の「よみがえる浮世絵」と特別展が続けて開催されます。江戸博における浮世絵研究の第一人者である小澤先生に浮世絵の魅力についてその見方、楽しさ等を話していただきます。

○講師略歴：おざわ・ひろむ

昭和22(1947)年長野県生まれ。明治大学大学院研究科博士課程修了。現在、江戸東京博物館都市歴史研究室長・教授。専門は日本美術・文化史。主な著書に『都市図の系譜と江戸』(吉川弘文館、2000年)、『「熙代勝覧」の日本橋』(小学館、2006年)など。

・開催日：7月25日(土)14:00～15:30

・申込締切：7月16日(木)必着

・会場：江戸東京博物館・1階会議室

・定員：130名 同伴者可(はがきに氏名連記)

・参加費：会員500円・同伴者600円(当日払い)

【企画担当責任者】藤村武雄（事業部会）

第84回「国技館100年を振り返る」

講師 水野尚文さん（『NHKグラフ大相撲』元編集長）

◆本年は国技館開館100年となります。この間、常陸山、梅ヶ谷、双葉山、栃錦、若乃花、大鵬、千代の富士、貴乃花など多くの名力士を輩出し、名勝負が行われました。100年の間に起こったいろいろの出来事を裏話を含め話していただきます。

○講師略歴：みずの・なおふみ

『NHKグラフ大相撲』(現『NHK大相撲中継』)の編集長として60年にわたり相撲を見てこられた。編著書に『大相撲力士名鑑 平成21年版』(共同通信社、2008年)など。

・開催日：8月22日(土)14:00～15:30

・申込締切：8月13日(木)必着

・会場：江戸東京博物館・1階会議室

・定員：130名 同伴者可(はがきに氏名連記)

・参加費：会員500円・同伴者600円(当日払い)

【企画担当責任者】藤村武雄（事業部会）

原稿を募集します

会員の投稿欄「えど友プラザ」への原稿を募集しています。戦前戦後の思い出、名所めぐりの感想、趣味や所属サークルのできごと、あるいは東京や江戸に関するなどを**1000字程度**にまとめて事務局宛お送りください。採用分については記念品を差し上げます。なお、原稿はお返しません。

見学会

「足利市内の史跡探訪」(バスツアー)

◆足利市は中世、足利氏によりつくられ、北関東で繁栄した都市です。江戸時代初期から渡良瀬川を使ってこの足利と江戸を往復していた廻船があり、米などを江戸に運び、帰路に阿波の藍玉などを持ち帰り、足利の織物産業に貢献していました。市内には多くの史跡や文化財がありますが、今回は史跡・足利学校、太平記の里、鎌阿寺(ばんなじ)を中心に散策し、伊万里・鍋島焼専門の栗田美術館を見学します。途中関東三大厄除けの一つ佐野厄除大師にも寄ります。午後6時ごろ江戸博帰着予定。

- 開催日：9月12日(土)午前8時集合、8時15分出発
- 集合場所：江戸博北側入口 レストラン前
- 申込締切：8月13日(木)必着
- 定員：120名(バス3台) 同伴者1名可(はがきに氏名、住所、電話番号連記)、申込多数の場合は抽選
- 参加費：会員6,000円(昼食代・観覧料を含む)、同伴者7,000円(同)。参加費は前納(参加予定者に振込先と期限を通知します)。

【企画担当責任者】岩松精(事業部会)

お申込方法

お申込方法

◆普通はがきに、①催事名・開催日、②会員番号、③氏名(同伴者連記)を明記して下記の「友の会事務局」へ。

「往復はがき」の必要はありません。

なお、見学会に限り傷害保険の関係で同伴者の氏名、住所、電話番号も書いてください。

◆締切：各催事の案内をご覧ください。

◆申込は、各催事ごとに会員1人1通。

◆友の会へのご意見・ご要望もご記入ください。

◆申込先：〒130-0015 東京都墨田区横網1-4-1
江戸東京博物館友の会事務局

*「えどはくカルチャー」など江戸博への申込と違い、普通はがきで宛先も友の会事務局と明記ください。お間違いなく!

*お申込いただきますと、「受講票」をお送りします。当日ご持参のうえ、受付でご登録ください。

なお「受講票」は逐次お送りするのではなく、申込締切数日後一斉にお送りしますので、それまでお待ちください。

*いずれも申込多数の場合は抽選となることがあります。

*「受講票」未着のお問合せや参加予定変更の連絡などはなるべく事務局員出勤の水曜日か金曜日(10時~12時、13時~17時)にお願いいたします。

*「受講票」がないと受講できません。必ず事前に申込をしてからご参加ください。

会報<えど友>第50号

平成21年7月1日発行(奇数月1日発行)

編集・制作：江戸東京博物館友の会広報部会

会員優待のお知らせ

●日本・ギリシャ修好110周年記念特別展

「写楽 幻の肉筆画

ギリシャに眠る日本美術

～マノスコレクションより～

開催迫る!

会期 2009年7月4日(土)~9月6日(日)

休館日：毎週月曜日、ただし7月20日(月・祝)は開館、翌21日(火)は休館

会員：一般650円、65歳以上320円、大・専門生520円

同伴者：一般1,040円、65歳以上520円、大・専門生830円

*小学生・中学生・高校生は65歳以上と同じ

次回予告

●特別展

「よみがえる浮世絵

～うるわしき大正新版画～

会期 2009年9月19日(土)~11月8日(日)

休館日：毎週月曜日、ただし9月21日(月・祝)、10月12日(月・祝)は開館、10月13日(火)は休館

会員：一般650円、65歳以上320円、大・専門生520円

同伴者：一般1,040円、65歳以上520円、大・専門生830円

*小学生・中学生・高校生は65歳以上と同じ

企画展のご案内

好評開催中!

●企画展

「発掘された日本列島2009展」

会期 2009年6月20日(土)~8月2日(日)

会場 常設展示室5階 第2企画展示室

●次回企画展

「江戸東京ねこづくし展」

会期 2009年8月13日(木)~9月27日(日)

会場 常設展示室5階 第2企画展示室

お知らせ

江戸博のミュージアムショップやレストランでは友の会の会員証を提示することによって割引が受けられます。ただし、書籍を除きますが、ほかに細かい条件がつくことがあります。店頭での表示や告知はありませんので、自分の方から会員証を提示して割引を受け、「えど友ライフ」をお楽しみください。